

平成 30 年度における県立文化施設等の個別事業評価に伴う事業の視察について

● 芝居小屋「長栄座」新春公演 湖国にて 歌と和楽器の出逢いの刻

主 催：滋賀県立文化産業交流会館

事業内容：明治時代に長浜市に建てられた癒しの芸能空間＝芝居小屋「長栄座」を文化産業交流会館イベントホールに期間限定の特設舞台として再現し、平成 23 年から 7 年間、古典芸能に親しむ環境づくりに努めてきた。今年度も創作邦楽作品から古典の本格的な作品まで幅広いラインナップを上演することで誰もが気軽に親しめる機会の拡充を図り、日本の伝統文化の魅力を再発見していただくことを願い開催した。
創作邦楽作品から古典の本格的な作品、滋賀県の寓話を元にした新作音楽劇、米原市をテーマにした新作の邦楽組曲を 2 部構成で披露。ロビーでは、滋賀県内の伝統産業の製品を展示販売した。

会 場：滋賀県立文化産業交流会館

視 察 日：平成 31 年 1 月 20 日（日）

出席委員：中川部会長、上田委員、吉田委員

● びわ湖ホール 名曲コンサート 華麗なるオーケストラの世界 vol. 1

主 催：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール・公益社団法人日本センチュリー交響楽団

事業内容：このコンサートでは「これぞ名曲！」といわれる交響曲や協奏曲など、魅力ある楽曲をオーケストラの生の演奏でお楽しみいただき、クラシック音楽ファンの拡大を図る。今回は「華麗なるオーケストラの世界 vol. 1」と題し、ヨーロッパの歌劇場で多くの舞台に立つ指揮者阪 哲朗（ばんてつろう）と、大津市出身で 2017 年のミュンヘン国際音楽コンクールピアノ部門で第 3 位に入賞した滋賀が誇る若手ピアニスト久末 航（ひさすえわたる）を迎えた。

会 場：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

視察日：平成 31 年 2 月 10 日（日）

出席委員：井上委員、片山委員

○評価部会委員による外部評価

事業名:文化産業交流会館 芝居小屋「長栄座」新春公演 湖国にて～歌と和楽器の出逢いの刻～

<p>重点施策1 文化による本県ブランド力の向上と国内外への効果的な発信</p> <p>重点施策2 地域で継承されてきた文化的資産の発掘・保存・活用</p>	評価すべき点	<p>伝統芸能で、全国レベルの演者を招聘し、かつ自主制作公演を行い、滋賀県のブランド力向上や発信していく試みは評価したい。</p> <p>「地歌」が演じられたり、米原をテーマにした組曲が新たに創作されたり、地域で継承されてきた文化資産を活用、発展させようとしている。しかも、全般的に滋賀を意識した演目となっていた</p> <p>かつて地方にあった身近な文化拠点としての芝居小屋の再現という明快なコンセプトによって、一般からの、邦楽や伝統芸能へのアクセスの回路を開き、長く持続してこられたことはそれ自体大いに評価できる。</p> <p>芝居小屋としての設定ならではの親密さの中で、毎年心待ちにするファンを一定数獲得しているように見受けられる点も良いと思う。</p> <p>古来有名な曲目をかけるだけでなく、土着在来の伝説や風土に取材した新作にも取り組まれている点も好ましい。</p> <p>伝統芸能の若手の担い手がこの場を通じて、鍛錬され評価を得られるとすると、一種の登竜門となり得ると思う。そうすると、さらに発信力を持つ。</p>
	改善が必要な点	<p>約900万円の投資をしたことが、県民や議会から批判を受けないためにも、海外でも上演できるクオリティを目指すことを検討していただきたい。</p> <p>わかぎえふ主宰の玉造小劇店（現代演劇）では、公演終了後の舞台挨拶は写真撮影を認め、SNSなどでの積極的な発信を奨励している。そうしたことも効果的な情報発信の観点から検討していただきたい。</p> <p>例えば琴糸などは伝統芸能の存続をモノの側面から支える手工業である。伝統芸能や文化財を裏側から支える重要な技術や物産が存在することも本県のブランド力にとってよいと思う。その意味では、「地域の産業との連携」ということも、地場産業、地域産品の単なる陳列・ブース出展という扱いに留まらず、（今回だと例えば琴糸生産者側と楽器奏者との舞台上でのやりとりや糸の違いと音の違いを感得できるような実演を交えることなどにより）文化のワザ資産（演奏及び演奏家）に加えて、文化を支えるモノ資産（楽器・素材）への理解を促す工夫や演出が期待される。</p> <p>一つの事業（公演）に対してレベルやフェーズの異なるいくつかの効果や成果を（我々が）期待していることが、かえって現場に影響を与えているのかもしれないが、「ブランド力」という観点からすると、事業の宛先、事業の間口が広くとられている（対象とする「顧客」が取捨選択されていない）ため、例えばまずいかもしれないが、ワイドショーなのか、ドキュメンタリーなのか、ニュースなのか、バラエティーなのか、教養なのか、時代劇なのか、視聴者参加型なのか…それらが交雑している印象もあった。</p> <p>演者・作曲者自らが司会進行や解説を行うことで、親近感や理解も進むこともあると思うが、その場合は幕間の進行や複数でのやりとりの際に間延びしないようにする準備が重要と思う。出演者や演奏家が一流であるのに対して、仮にその進行や細部の演出が行き届かないことによって、肝心の演奏・演技以外のところで、同好の士の集まりにおける学芸会的な印象を与えてしまっては勿体ない。人材育成という観点からも、一定の素養をもち、勘所を押さえて聴衆向けに解説・紹介できる「ナビゲーター」「席亭」の発掘・育成に向けた取り組みとその支援策があってもよいと思う。</p> <p>滋賀県と登場するアーティストのつながりを明確に示した方が良い。（内部人材と外部人材を峻別する。）</p>
	評価すべき点	<p>誰もが本物の伝統芸能の文化に親しむ機会を作ったこと、加えて、司会の進行で冗談を言われたり、朗読劇で宅配便や携帯を登場させたり、伝統芸能の枠に縛られない親しみやすい工夫をされていた点などは率直に評価したい。</p> <p>邦楽・若手人材の育成・支援の取り組みそのものが県内においては貴重であると思う。また、若い才能のために、お稽古ごとの発表会のような場ではない、芸芸の披露の場を提供しようとしていた点も評価できる。</p> <p>若手芸術家（伝統芸能）が、これまでどれ程育ってきたか、それらをデータ的にも把握しておく必要があるが、とりかかりとしては、この事業があることを評価したい。</p>
	改善が必要な点	<p>子ども・若者の参加が少ないように見受けられたが、重点施策3に鑑み検討の余地がある。</p> <p>今回の公演を記録されていたが、今後アーカイブとしてWEB等での発信なども検討していく余地はないか。</p> <p>長栄座への出演が古典芸能の若手の登竜門になればよい。</p> <p>出演者のうち、育成プログラムによる育成人材が誰なのかが、パンフレットで明示され、舞台上でも紹介されると良いと思う。「長栄座」というイベントを、若い才能の成果の発表の舞台としてだけでなく、観客・県民も参加しての彼らの鍛錬の場として考えるなら、育成中の若手には酷かもしれないが、現時点での彼らの力量とベテランの力量の差をあえて聞き比べることが出来る機会（番外編としての公開レッスンのようなもの）があってもよいのではないか。そのことが、ひいては若手の成長・活躍に対する観客・県民の感情移入や応援の気持ちを喚起することにつながるのではないか。</p> <p>「見巧者」の育成への工夫も重要かと思う。うまいものは誰が聞いてもうまい、良いものは確かに良いというのは真理であり、確かに素人も驚嘆する圧倒的な演技というものもあるが、素人が初めて聞く場合、聞き分ける力や手掛かりを持たないために、どれをきいてもうまいのかまずいのかわからないということもある。やり方はともかく、邦楽に初めて触れる素人の耳や目を育てる意味で、技量の違いによる出来の違い（あるいは同じ曲での枯淡とフレッシュ双方の技量と味わいの違いなど）を聞き比べ、見比べることが出来るモノサシやヒント（演奏のこの場面では出てくる“超絶技巧”に注目）というようなアナウンスレベルのものでも）が提供されると良いのではないか。</p> <p>育成・支援に関わるデータを別に示しておく必要がある。</p>

総 評	評価すべき点	7年間継続し、今回もほぼ満員の集客があった点は、誰もが本物の伝統芸能に触れる機会を作る試みとして評価したい。
		野心的に頂きを高くすることと親切に裾野を広げることのどちらをめざすのかをめぐっては、いよいよ旗幟を鮮明にされると良いかと思う。
		「長栄座」が、良い意味で「客を選ぶ」あるいは「客を育てる」ことによって、まさにブランドとして屹立していられることを願う。一方、ためらわず旗を掲げてもらえるようにするためには、我々評価する側も「大きな期待」は寄せながらも「多くを期待し過ぎない」ことで、企画・運営される皆さんが、本当に追求したい、大切にしたい目標に向かってシンプルに努力することを後押しできるようになるのかもしれないと思う。 能にしろ舞踊にしろ、滋賀には数百年から千年来にわたる歌枕・演目・曲目が各地にあるわけでそうした古来の自然・文化的資産をますます取り入れて、「だから滋賀でなくてはならない」、「だから長栄座でなければならない」と誰もが認める事業に育てていって頂きたいと思う。
	改善が必要な点	平成23年度以来の事業の継続効果が出てきていると思う。(育成→発表→自立などの)
		誰もが伝統文化に親しめることを目標としているが、県の文化振興基本方針の重点施策のいずれにも対応していない面がある。ちなみに、[重点施策3]で本物の文化に触れる機会の充実とあるが、子ども・若者を対象としたものである。
		文化振興基本方針を意識するならば、[重点施策3]を重視して子ども・若者を観客に増やす努力をするか、もしくは、[重点施策1]を重視して、海外でも上演できるクオリティを目指すのか、核となる目的・目標がなになのか、今一度整理する必要があるのではないか。もちろん、現場の実態に文化振興基本方針を併せた方がよいというならば、文化振興基本方針を見直すことも考えうる。
		司会のつながが悪かったり、朗読劇などで演技力にばらつきがあったり、詰めがあまりいところがあった。池上氏が出演と演出を兼ねる限界がなかったか。
		悉皆の事務事業評価というより、抽出の政策評価としての性格を有するので、シート名を政策評価シートに変更したらどうか。
		若手人材育成プログラムの一環でもあることについて、講演中あるいはパンフレット等でももう少しその内容やプロセスの紹介があっても良いように思う。「著しい成果」という表現が見られたが、長きにわたって取り組まれてきた事業であればこそ、その成果の具体的な中身が知りたい。それは単に観客動員等の数字だけでなくよい。この分野における人材育成のゴールとは何か、育成事業において育成人材に求める技芸の到達点はどこか、といった点を聴衆・県民とも共有して「長栄座」およびそこに集う才能を、聴衆・県民こそ育てるという機運がますます高まればと思う。
		一般の初心者あるいは外国人向けの紹介・普及という点では、同じ対象向けのクラシック音楽・オペラ等の演出や工夫に一日の長があるように思う。幕間の演出等に関しては博物館の学芸員等のアイデアも取り入れる等、舞台上だけでなく舞台の外でも異分野のプロとのコラボを推し進めてみるのも良いのではないか。
		入場者の分布をみると、やはり高齢者に偏っている。若者の入場を促す方策を講じるべき。

○評価部会委員による外部評価

事業名:びわ湖ホール 名曲コンサート「華麗なるオーケストラの世界 vol.1」

重点施策1 文化による本県ブランド力の向上と国内外への効果的な発信 重点施策2 地域で継承されてきた文化的資産の発掘・保存・活用	評価すべき点	<p>地元出身の若いピアニストのお披露目の場をつくることができたことは滋賀県としての将来的な対外発信の点で意義あることと評価できる(重点施策1)。</p> <p>ヨーロッパを中心に活躍する指揮者阪哲朗と、大阪を中心に関西一円で活動している日本センチュリー交響楽団という組み合わせで、「名曲コンサート」の名に違わず、誰もが聴いたことのある名曲をプログラムに選びコンサートを開催したという点。</p>
	改善が必要な点	<p>地元の楽団ではない日本センチュリー交響楽団による年1回の名曲コンサートが県のブランド力や発信につながることは期待しにくい。地元のホールで名曲をナマで聴ける県というブランドを確立するためにはもう少し高頻度の開催が必要。</p> <p>クラシックコンサートにしては、聴衆に若い方が比較的多くおられたが、やはり、ご年配の方の割合が高いように見受けられました。子どもの頃にいろいろな形で、本物の音楽に親しむ工夫をしていただいていると思うのですが、残念ながら、本当の意味でそれが「地域で継承」されてはいなく、「文化的資産」ともなっていないのではないのでしょうか。</p>
重点施策3 子ども・若者が本物の文化に触れる機会の充実 重点施策4 若手芸術家等の育成・支援 重点施策5 文化活動を支える人材(アートマネージャーなど)の育成・支援	評価すべき点	<p>低廉な価格でチケットを提供していることは子ども・若者の機会の提供に貢献できる可能性を持つ点で評価できる(重点施策3)。また、地元出身の若手ピアニストへの公演機会の提供は若手芸術家等の育成・支援に寄与するものと評価できる(重点施策4)。</p> <p>滋賀県出身でヨーロッパでも活躍中の若手ピアニストの久末航の凱旋公演とでもいうべきコンサートだったので、若い聴衆にも、親しみを持ってるとともに、「私もこんなふうになりたい」という憧れをもいじかせることができたのではないかと思います。休憩時間中にも、ロビーでそのような会話が聞かれました。</p>
	改善が必要な点	<p>チケットは低廉な価格で提供されていたものの、客席を目視した範囲では必ずしも子どもや若者層の来場が多いとはいえない状況にあった。より効果的な広報活動が求められる。</p> <p>折角の凱旋公演だったので、久末さんには、コンサート終了後にレセプションのようなことをしていただき、演奏者と聴衆が感動を共有すると共に、聴きに來られたお客様と気軽に話ができる機会が設けられれば、一方的に演奏する、一方的に聴くだけの関係性以上のトータルな意味での「音楽」を愉しめたのではないかなと思いました。</p>
重点施策6 新しい豊かさを実感できる文化芸術活動の推進 重点施策7 「美の滋賀」づくりの推進 重点施策8 自律的な文化活動の促進 重点施策9 文化活動の環境の整備	評価すべき点	<p>県民の鑑賞機会の提供(重点施策9)に一定の貢献をしている点は評価できる。</p> <p>びわ湖ホールのホームページに、当日のアンコール曲の紹介が載っていたのはよかったでした。</p>
	改善が必要な点	<p>普段から鑑賞習慣のあるリピーターが集まっているのか、それともあまり鑑賞機会がなかった人々に機会を提供することができたのかが不明。</p> <p>指揮者の阪さんも京都のご出身(?)ということで、ほぼ地元ということを考えれば、プレトーク等で聴衆との距離をぐっと縮めたうえで本番の演奏という流れで演奏会をやっていただけなかったかなという気がします。また、プログラムが非常にメジャーな曲だっただけに、例えば、チャイコフスキーのピアノ協奏曲についての聴き所等、ほんのワンポイントで結構ですのでレクチャーがあれば、より深く楽しむことができたのではないかと思います。</p>
総 評	評価すべき点	<p>確実な成果としては、地元出身の若手ピアニストの存在を知らしめると言う点で一点の成果をあげられたという点を指摘できる。短期的には重点施策4に貢献するものであり、長期的には重点施策1につながるものと言える。</p> <p>コンサートそのものは、名曲コンサートの名に違わず、ご来場のお客様方は、演奏、雰囲気まですべて含んだものトータル、コンサート時のびわ湖ホールのあの時間、あの空間を一緒にたのしめたのではないかと思います。</p>
	改善が必要な点	<p>名曲コンサートという企画であれば、その成果を測れるようなアンケート調査の設計が必要であろう。普段の鑑賞行動の有無と頻度、コンサートに来ることを決めたきっかけ(曲目、指揮者、オケ、ソリスト、日時、料金 他)、鑑賞してさらなる関心が広がったか、等といった項目を調査することで成果を把握することができる。</p> <p>せっかくコンサートという空間、時間を共有できた人々が、発展的に次のステップへ進める仕掛けに欠けていたことが残念です。例えば、演奏者と聴衆とか演奏後に触れ合える場所、時間を設けること。リアルなものができないのであれば、ホームページなどに参加者の声を共有できる場を設定するということもよいのではないのでしょうか。コンサート終了後のあわただしい状況下で、ペーパーのアンケート記入だけでは、コンサートの感動や、次へつながっていくような意見を十分に主催者へ伝えていくことは難しいと思います。</p> <p>演奏者に自身の持っている力を存分に発揮できる場を作り出していく(準備等も含め)とともに、聴く楽しみを持った参加者が、奏でる楽しみを持つ側になってもらう工夫も必要だと思います。例えば、日本センチュリー交響楽団さんのように、ほぼ定演に近い形でびわ湖ホールで演奏していただいているオーケストラであれば、公開リハーサルを試みるとか、コンサートの少し後に楽器や奏法の解説会のようなことをやってみるということはどうでしょうか。実際にこのような企画を行うということになれば、解決しなければならないハードルはたくさんあると思いますが、是非、できるところからチャレンジしていただきたいと思います。「演奏する人」と「聞く人」をどう結び付け、愉快な空間を作り出していか、その場を提供する方々にはこの仲介者の役割をどう果たしていくのかということが問われている、期待されているということを常に意識して業務に当たっていただければと思います。</p>

個別事業評価にかかる対応について

(別紙様式)

【芝居小屋「長栄座」新春公演 湖国にて～歌と和楽器の出逢いの刻～】

区 分	評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
重点施策1 文化による本県ブランド力の向上と国内外への効果的な発信 重点施策2 地域で継承されてきた文化的資産の発掘・保存・活用	①約900万円の投資をしたことが、県民や議会から批判を受けないためにも、海外でも上演できるクオリティを目指すことを検討していただきたい。	海外で話題になるような取り組みを目指すべきというご提言は、今後、企画内容を確認していく段階での重要な視点として意識して参ります。ただし、古典芸能分野のなかでも邦楽をめぐる環境は最も厳しい状況にあり、国際的に活躍している日本の邦楽演奏家は非常に少なく(和楽器バンドは活躍しているが)、まず、国内で安定して演奏活動ができる環境(鑑賞者の獲得)ができてはじめて、海外も視野に入るものと思われます。また、日本の和楽器による音楽が世界各地で親しまれる下地づくりや国際コンクール等で新しい人材の発掘を行うなど国レベルでの支援が急務となっていると考えます。本来、国が担うべき日本の古典芸能・邦楽振興を一地方の滋賀の県立ホールである当館が8年間も継続できていることは全国的にみても特筆すべきことという認識は共有していただきたいと思います。 次に、900万円の経費については、仮設の芝居小屋という装置の設置・撤収にかかる経費が200万円弱ほどあり、さらに仮設に伴う舞台スタッフの増員経費も加算していくと純粋なソフト(出演料等)へ支出できる予算は250万円程度です。他ジャンルでも演劇公演の新作は3000万円規模ということも聞き及びます。もし、海外公演を本気で検討するのであれば、数千万円の投資が必要かと思います。
	②わかぎえふ主宰の玉造小劇場(現代演劇)では、公演終了後の舞台挨拶は写真撮影を認め、SNSなどでの積極的な発信を奨励している。そうしたことも効果的な情報発信の観点から検討していただきたい。	SNSで世界への発信ができる時代であり、著作権等の問題がなければ、稽古・リハーサルや公演の制作過程をできるかぎり、情報発信して、完成する前の制作 現場の空気感をリアルタイムで伝えられるようにYouTubeなどを活用できればと思います。
	③例えば琴系などは伝統芸能の存続をモノの側面から支える手工業である。伝統芸能や文化財を裏側から支える重要な技術や物産が存在することも本県のブランドといってよいと思う。その意味では、「地域の産業との連携」ということも、地場産業、地域産品の単なる陳列・ブース出展という扱いに留まらず、(今回だと例えば琴系生産者側と楽器奏者との舞台上でのやりとりや糸の違いと音の違いを感得できるような実演を交えることなどにより)文化のワザ資産(演奏及び演奏家)に加えて、文化を支えるモノ資産(楽器・素材)への理解を促す工夫や演出が期待される。	昨年度(平成29年9月23日)に当館の小劇場で実施した「絹の里から～声楽と和楽器の素敵な音楽～」長浜市木之本町にある和楽器の絃の製造会社、丸三ハシモト株式会社 代表取締役社長 橋本英宗氏に楽器絃の製造にまつわる様々なエピソードをお話しいただくコーナーをつくり、ご披露いただいたことがあります。実演を交えてというところまではできていませんが、職人や技術者が加わることで鑑賞者の方々にも新しい見方ができるような演奏会の構成・演出が可能であれば、今後も同様に検討してまいりたいと思います。
	④一つの事業(公演)に対してレベルやフェーズの異なるいくつかの効果や成果を(我々が)期待していることが、かえって現場に影響を与えているのかもしれないが、「ブランド力」という観点からすると、事業の宛先、事業の間口が広くとられている(対象とする「顧客」が取捨選択されていない)ため、例えばまずいかもしれないが、ワイドショーなのか、ドキュメンタリーなのか、ニュースなのか、バラエティーなのか、教養なのか、時代劇なのか、視聴者参加型なのか…それらが交雑している印象もあった。	この公演が様々な演目を幅広く、選定していることについてのご指摘と思われますので、この点についてお答えいたします。 まず、この公演は、滋賀の地域性が色濃くアピールできる演目を多く選んでおります。次に声楽、朗読、イラスト画、風景映像との組み合わせによる和楽器演奏という幅広い形態で鑑賞者に飽きさせない工夫をしています。老若男女、多様な鑑賞者に自分の感性に合った和楽器音楽をアラルトで選んでいただき、自分に合う楽しみ方を見つけていただきたいとの思いから間口を広げております。 「ブランド力」については、一言ではお答えできませんが、滋賀ゆかりの素材を発掘して上演することが「ブランド力」の構築につながっていくのではないかと考えております。
	⑤演者・作曲者自らが司会進行や解説を行うことで、親近感や理解も進むこともあると思うが、その場合は幕間の進行や複数でのやりとりの際に間延びしないようにする準備が重要と思う。出演者や演奏家が一流であるのに対して、仮にその進行や細部の演出が行き届かないことによって、肝心の演奏・演技以外のところで、同好の士の集まりにおける学芸会的な印象を与えてしまつては勿体ない。人材育成という観点からも、一定の素養をもち、勘所を押さえて聴衆向けに解説・紹介できる「ナビゲーター」「席亭」の発掘・育成に向けた取り組みとその支援策があつてもよいと思う。	進行役、ナビゲーターの重要性は、ご指摘の通りであると認識しておりますが、適切な人材がなかなか見つからないのが実情です。映画でいえば、かつての淀川長治のような逸材が、邦楽関係で見つけることができれば鑑賞者の裾野を広げる推進力になるに違いないとは思っております。
	⑥滋賀県と登場するアーティストのつながりを明確に示した方がよい。(内部人材と外部人材を峻別する。)	今回、出演者の紹介が十分ではなく、鑑賞者が当館で研鑽を積んでいる人材が誰なのか、招聘アーティストが誰なのか判別できなかったと思われます。今後は当日配布のプログラムで明記してまいります。

区 分	評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
重点施策3 子ども・若者が本物の文化に触れる機会の充実 重点施策4 若手芸術家等の育成・支援 重点施策5 文化活動を支える人材(アートマネージャーなど)の育成・支援	⑦子ども・若者の参加が少ないように見受けられたが、重点施策3に鑑み検討の余地がある。	長栄座公演だけでなく、普及啓発型の企画として今年度実施した「ゆかたで楽しむ伝統芸能」公演のような体験型ワークショップを組み合わせた催しも継続して開催してまいります。
	⑧今回の公演を記録されていたが、今後アーカイブとしてWEB等での発信なども検討していく余地はないか。	公演そのものは、長時間になるのでダイジェスト版を編集した形態で著作権等の問題がなければWEB発信することを検討します。
	⑨長栄座への出演が古典芸能の若手の登竜門になればよい。	ご指摘のように長栄座への出演が古典芸能の若手の登竜門と呼ばれるように内容の充実を図り、グレードを上げていきたいと思っております。
	⑩出演者のうち、育成プログラムによる育成人材が誰なのか、パンフレットで明示され、舞台上でも紹介されると良いと思う。「長栄座」というイベントを、若い才能の成果の発表の舞台としてだけでなく、観客・県民も参加しての彼らの鍛錬の場として考えるなら、育成中の若手には酷かもしれないが、現時点での彼らの力量とベテランの力量の差をあえて聞き比べることが出来る機会(番外編としての公開レッスンのようなもの)があってもよいのではないか。そのことが、ひいては若手の成長・活躍に対する観客・県民の感情移入や応援の気持ちを喚起することにつながるのではないか。	ご指摘のとおり、今回、出演者の紹介が十分ではなく、鑑賞者が当館で研鑽を積んでいる人材が誰なのか、招聘アーティストが誰なのか判別できなかったと思われます。今後は当日配布のプログラムで明記して参ります。 公演日に公開レッスンなどを組み合わせられると企画の幅が広がるとは思われるのですが、現状では日程的に非常に困難であると思われるので、公演のプログラム構成や進行で演奏テクニックなどをわかりやすく解説するように工夫してまいります。
	⑪「見巧者」の育成への工夫も重要かと思う。うまいものは誰が聞いてもうまい、良いものは確かに良いというのは真理であり、誰かに素人も驚嘆する圧倒的な演技というもあるが、素人が初めて聞く場合、聞き分ける力や手掛かりを持たないために、どれをきいてもうまいのかまずいのかわからないということもある。やり方はともかく、邦楽に初めて触れる素人の耳や目を育てる意味で、技量の違いによる出来の違い(あるいは同じ曲での枯淡とフレッシュ双方の技量と味わいの違いなど)を聴き比べ、見比べることが出来るモノサンやヒント(「演奏のこの場面に出てくる“超絶技巧”に注目」というようなアナウンスレベルのものでも)が提供されると良いのではないか。	ご指摘のように見所聴き所を上手に解説してくれる、邦楽初心者に親切な案内役、ガイドさんの役回りがいると、企画がより楽しめると思われます。解説が長すぎてお腹一杯にならないように消化不良を起こさない程度の適度な解説をいれるように心がけてまいります。
	⑫育成・支援に関わるデータを別に示しておく必要がある。	公演の当日プログラムに掲載すべき事案であるか、一般鑑賞者に提示すべきことか判断がしかねますが、何らか人材育成の状況はお伝えしておくべきと思われますので、簡潔にお伝えするよういたします。
総 評	⑬文化振興基本方針を意識するならば、「重点施策3」を重視して子ども・若者を観客に増やす努力をするか、もしくは、「重点施策1」を重視して、海外でも上演できるクオリティを目指すのか、核となる目的・目標がなになのか、今一度整理する必要があるのではないか。	ご指摘のとおり、将来の努力目標と当面の目標を峻別しながら、これまでの取り組みの総点検を行い、当館にとって最も優先度の高い目的・目標を明確化してまいります。
	⑭司会のつながが悪かったり、朗読劇などで演技力にばらつきがあったり、詰めがあまりいところがあった。池上氏が出演と演出を兼ねる限界がなかったか。	池上氏が出演と演出を兼ねることに特段の支障があったとは考えておりませんが、ご指摘の点は、改善する必要があると思っております。
	⑮若手人材育成プログラムの一環でもあることについて、講演中あるいはパンフレット等でもう少しその内容やプロセスの紹介があっても良いように思う。「著しい成果」という表現が見られたが、長きにわたって取り組まれてきた事業であればこそ、その成果の具体的な中身が知りたい。それは単に観客動員等の数字だけでなくよい。この分野における人材育成のゴールとは何か、育成事業において育成人材に求める技芸の到達点はどこか、といった点を聴衆・県民とも共有して「長栄座」およびそこに集う才能を、聴衆・県民こそ育てるという機運がますます高まればと思う。	今後は人材育成の到達点について当日プログラムに記載し、県民の方々にご理解をいただけるように対応して参ります。 とりわけ、日本の古典芸能・邦楽に取り組む意義については、繰り返し、県民の方々が納得される説明を懇切丁寧に行ってまいります。 邦楽・和楽器をめぐる環境は今後ますます、厳しさを増していくことが予想されます。当館のこの事業が、官民一体になって、世界に誇る日本の伝統文化の継承と発展の機運を高める一石を投じることにつながるように尽力してまいります。
	⑯一般の初心者あるいは外国人向けの紹介・普及という点では、同じ対象向けのクラシック音楽・オペラ等の演出や工夫に一日の長があるように思う。幕間の演出等に関しては博物館の学芸員等のアイデアも取り入れる等、舞台上だけでなく舞台の外でも異分野のプロとのコラボを推し進めてみるのも良いのではないか。	公演当日に配布しているプログラムでは、初心者にも読みやすく、理解しやすい内容とレイアウトを心がけています。外国人に対しては、英訳プログラムを受付で配布できるように準備しております。異分野のプロとのコラボについては、人材の情報収集から始めて、適任者がみつければ、企画に反映してまいります。

区 分	評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
	⑪入場者の分布をみると、やはり高齢者に偏っている。若者の入場を促す方を講じるべき。	県内の高校箏曲部・邦楽部と緊密に連携して情報交換を行っていますが、学校行事との兼ね合いで集客につながっていません。引き続き、関係構築を強めていく所存です。若手の出演者を起用するなど同年代の鑑賞者を増加させるという方法も考慮しております。

個別事業評価にかかる対応について

(別紙様式)

びわ湖ホール 名曲コンサート「華麗なるオーケストラの世界 vol.1」

区 分	評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
重点施策1 文化による本県ブランド力の向上と国内外への効果的な発信 重点施策2 地域で継承されてきた文化的資産の発掘・保存・活用	①地元の楽団ではない日本センチュリー交響楽団による年1回の名曲コンサートが県のブランド力や発信につながることは期待しにくい。地元のホールで名曲をナマで聴ける県というブランドを確立するためにはもう少し高頻度の開催が必要。	びわ湖ホールにおける日本センチュリー交響楽団のコンサートとしては、ホール主催の同公演とは別にホール共催によりもう1公演を実施することにより、年2回の公演数を確保しています。このほか、名曲コンサートとしては、器楽や声楽のコンサート(本年度は神尾真由子ヴァイオリン・リサイタル)も開催しています。
	②クラシックコンサートにしては、聴衆に若い方が比較的多くおられたが、やはり、ご年配の方の割合が高いように見受けられました。子どもの頃にいろいろな形で、本物の音楽に親しむ工夫をしていただいていると思うのですが、残念ながら、本当の意味でそれが「地域で継承」されてはいなく、「文化的資産」となっていないのではないのでしょうか。	名曲コンサートシリーズの青少年やシアターメイツの来場は、近年減少傾向にありましたが、今回は、本県出身の若手ピアニスト久末航氏が出演することもあり、68名(H29:38名)に増加しました。しかしながら、ソリスト頼みでなく、地域の若年層がクラシック音楽を楽しめる土壌づくりに力を入れていきたい。 なお、びわ湖ホールでは、小学生を招待してオーケストラ公演を行う「びわ湖ホール音楽会へ出かけよう!」のほか、学校の体育館において演奏する「学校巡回公演」や、音楽の授業としてコンサートや合唱指導を行う「ふれあい音楽教室」を教育委員会と連携して実施し、次代を担う子どもたちに本物の音楽の素晴らしさに触れる機会を提供し、将来に向かって舞台芸術に親しむことができるような取組を行っています。
重点施策3 子ども・若者が本物の文化に触れる機会の充実 重点施策4 若手芸術家等の育成・支援 重点施策5 文化活動を支える人材(アートマネージャーなど)の育成・支援	③チケットは低廉な価格で提供されていたものの、客席を目視した範囲では必ずしも子どもや若者層の来場が多いとはいえない状況にあった。より効果的な広報活動が求められる。	同公演では、青少年(25歳未満)、シアターメイツ(18歳未満)の料金を設定し、若者に来ていただきやすい価格設定を行っていますが、更なるPRに努めます。
	④折角の凱旋公演だったので、久末さんには、コンサート終了後にレセプションのようなことをしていただき、演奏者と聴衆が感動を共有すると共に、聴きにいられたお客様と気軽に話ができる機会が設けられれば、一方的に演奏する、一方的に聴くだけの関係性以上のトータルな意味での「音楽」を愉しめたのではないかなと思いました。	サイン会やホワイエでの見送りを行っている公演もありますが、本公演では行っていませんでした。地元出身アーティストということで機会を設けてもよかったと思います。(本年度の神尾真由子ヴァイオリン・リサイタルではサイン会を実施、びわ湖ホール声楽アンサンブルの各公演では見送りを実施しています。)
重点施策6 新しい豊かさを実感できる文化芸術活動の推進 重点施策7 「美の滋養」づくりの推進 重点施策8 自律的な文化活動の促進 重点施策9 文化活動の環境の整備	⑤普段から鑑賞習慣のあるリピーターが集まっているのか、それともあまり鑑賞機会がなかった人々に機会を提供することができたのかが不明。	平成29年度の名曲コンサートのアンケート集計の結果では、びわ湖ホールへの来館5回以上が約68%(20回以上20.6%、10回以上31.7%、5回以上15.8%)となっています。(本公演のアンケートについては現時点で未集計です。)
	⑥指揮者の阪さんも京都のご出身ということで、ほぼ地元ということを考えれば、プレトーク等で聴衆との距離をぐっと縮めたうえで本番の演奏という流れで演奏会をやっていただけなかつたかなという気がします。また、プログラムが非常にメジャーな曲だっただけに、例えば、チャイコフスキーのピアノ協奏曲についての聴き所等、ほんのワンポイントで結構ですのでレクチャーがあれば、より深く楽しむことができたのではないかなと思いました。	ご意見をふまえ、今後の参考にいたします。

区 分	評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
総 評	⑦名曲コンサートという企画であれば、その成果を測れるようなアンケート調査の設計が必要であろう。普段の鑑賞行動の有無と頻度、コンサートに来ることを決めたきっかけ(曲目、指揮者、オケ、ソリスト、日時、料金 他)、鑑賞してさらなる関心が広がったか、等といった項目を調査することで成果を把握することができる。	現行のアンケートは、すべての公演について、性別、年代、住所、来館方法、宿泊の有無、何で知ったか、公演の感想(全体的に、内容、出演者、スタッフの対応)、興味のジャンル、来館回数を聞いており、公演ごとに項目を変えることはしていません。ご意見をふまえ、今後の参考にいたします。
	⑧せっかくコンサートという空間、時間を共有できた人々が、発展的に次のステップへ進める仕掛けに欠けていたことが残念です。例えば、演奏者と聴衆とか演奏後に触れ合える場所、時間を設けること。リアルなものができないのであれば、ホームページなどに参加者の声を共有できる場を設定するというのもよいのではないのでしょうか。コンサート終了後のあわただしい状況下で、ペーパーのアンケート記入だけでは、コンサートの感動や、次へつながっていくような意見を十分に主催者へ伝えていくことは難しいと思います。	SNSで公演の感想を発信してもらえるように当日配布プログラムで呼びかける等の工夫したいと思います。
	⑨演奏者に自身の持っている力を存分に発揮できる場を作り出していく(準備等も含め)とともに、聴く楽しみを持った参加者が、奏でる楽しみを持つ側になってもらう工夫も必要だと思います。例えば、日本センチュリー交響楽団さんのように、ほぼ定演に近い形でびわ湖ホールで演奏していただいているオーケストラであれば、公開リハーサルを試みるとか、コンサートの少し後に楽器や奏法の解説会のようなことをやってみるということはどうでしょうか。実際にこのような企画を行うということになれば、解決しなければならないハードルはたくさんあると思いますが、是非、できるところからチャレンジしていただきたいと思います。「演奏する人」と「聞く人」をどう結び付け、愉快的空間を作り出していか、その場を提供する方々にはこの仲介者の役割をどう果たしていくのかということが問われている、期待されているということを常に意識して業務に当たっていただければと思います。	一般公募で出演者を募る「アンサンブルの楽しみ」または「ジルヴェスターコンサート」を毎年行っています。そういった参加型公演と他公演をさらに強く関連づけるなど、工夫していきたいと思います。